

講演 2: フィンランド 15:10~15:35

「学びをめぐる変化は PISA の結果に影響を与えるのか」

渡邊あや

熊本大学 大学教育機能開発総合研究センター 准教授

周知の通り、PISA は、日本をはじめ、各国の教育に多大な影響をもたらしている。教育界に巻き起こったフィンランド・ブームは、そのうちのひとつであるといって差し支えないだろう。では、フィンランドにおける PISA の影響は、どのようなものであったのか。本発表では、フィンランドが、PISA の結果をどのように受け止め、これにどのように向き合ってきたのかという観点から、これにアプローチする。

フィンランドは、一般に、教育制度や内容において、PISA の影響をさほど受けていない国と考えられている。これは、PISA における好成績が、現行制度に対する支持と捉えられ、「変化」や「変革」という意味での影響を生まなかったことによるものである。しかしながら、このことは、影響が全くなかったことを意味するものではない。実際、PISA における好成績は、産業界を中心に盛り上がっていた義務教育制度を見直す動きを鎮める要因となった。つまり、「変化」や「変革」を行わないという意味での影響をもたらしたのである。

PISA の影響は、また、個別の施策においても看取できる。その一例が、学校の福祉的機能の強化である。PISA は、フィンランドの子どもたちの高い学習到達度とともに、彼らが他の国の子どもたちに比べ、学校や学習を嫌い、怠けがちであるという傾向も明らかにした。これらを将来的に社会的疎外につながるものとして問題視したフィンランド政府は、学校における子どもたちの幸福感・安心感の向上を教育政策の最優先事項と位置づけ、これに取り組んだ。PISA の結果が発するメッセージを受け止め、政策に反映させてきているのである。

以上のことから、フィンランドが「PISA の優等生」と呼ばれる所以が、高い学習到達度のみではなく、PISA の結果を真摯に受け止め、政策立案に活かすというその対応にもあることが分かる。

さらに、報告では、フィンランドにおける PISA の受容及び活用に加え、フィンランドにおいて近年進められている改革と PISA の結果との関連についても触れる。PISA におけるフィンランドの好成績の「秘密」については、当初、その理由を、フィンランドの教育制度や直近の教育改革に求める分析が数多くなされた(その中には、フィンランド教育省自身の手によるものも含んでいる)。しかしながら、PISA によって評価された教育制度や政策は、歳月を経る中、社会的・経済的変化の影響もあり、少しずつその姿を変えつつある。こうした子どもたちの学びをめぐる変化が、どのような影響をもたらしているのか。これまでの PISA の結果及びその分析などに照らし合わせながら、検討したい。